SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Memory time and real time of address terms for "father" : Glottogram data and quantified data

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 史雄, 半沢, 康, 山下, 暁美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029723

「お父さん」の呼称接辞の記憶時間と実時間
― グロットグラムデータと数値化による２極化 ―

井上史雄・半沢康・山下暁美

キーワード：グロットグラム、お父さん、呼称、実時間、記憶時間

１　本稿の位置づけ

１．１　「お父さん」の先行研究

最初に、呼称「お父さん」に関わるこれまでの調査報告を展望する。調査の時期や地域・規模、調査対象の選定、質問方法（記憶時間の活用の有無）など、多様な報告が見つかった。教育心理学分野で行われたアンケート調査など、見逃されていた文献を見ることができた[1]。結論を示すと、すべてこれまでのグロットグラム調査の結果と一致するもので、「お父さん」使用の割合などは、日本各地のグロットグラム調査のパターンと一致する。都市部と農村部の違い、社会階層との関係など、グロットグラム調査ではとらえにくい細かい状況も、文献調査で明確になった。ただ裏返して、文献のデータから、グロットグラム調査による大きな地域差・世代差（変化）の傾向を再現することは困難だった。

以下に呼称「お父さん」について、主な報告を簡略化してまとめる。平山（1993）および国立国語研究所（1989）によって全国各地の「父」の分布が分かる。１地点で多様な語形が併用される様相が一覧できる。国立国語研究所（1986）は、東北地方などの親族呼称の集落内同一性について、社会学者の考察も含む。柴田編（1978）には関連地域の親族呼称の記述がある。新潟県では家庭内・集落内で子ども中心の呼称が共有されるために、曾祖父や祖父が家庭

[1] 中学生期をピークに呼称の交替（「パパ」から「お父さん」へなど）がありうることの指摘は重要である（大野2009、和田2009）。

内の「父」に当たる人を（つまり自分の孫や息子を）トーチャンと呼ぶ例が記されている（野口2006）。川本（1978）の記述する下北半島と同様の共通語化が、世代交代とともに起こりうる。

加藤（1982）の方言地図調査地域は福井県若狭地方で、家族間の呼称について体系的に扱っており、父・母については成人の前と後に分けて尋ねるという記憶時間を活用した調査法を採用している。併用語形については「新古の判断」という記憶時間も採用している。家格による使い分けがこの地域に広く分布しており、個人の回答を扱うには用心が必要なことも論じる。父親については

チャン　→　オトッツァン　→　オトーサン

という変化があった。この三つの呼称は、古い下層の山間部のことば、中間の中層の都市周辺部のことば、新しい（少数の）上層の（都市部の）ことばと位置づけられていたが、成人前よりも成人後の言い方として右側が多くなる。近畿地方のオトーサンが1970年代の高年層（多分1900年代生れが主）で広がりはじめていたことが伺える。岸江他（2017）には近畿地方全体の「お父さん」の分布図が収録されており、井上他（2022）で加工されて、標準語形オトーサンの進出が明らかになった。本論文**図５－３**の分布と合致する情報が、面としての地理的分布で得られた。

小池（2001）は語源をふまえて大分類し、以下の順の周圏分布を指摘する。A親系（アヤ　アーヤ　ウヤン　ウヤ　ウヤー）；B父系（チチ　ドド　デデ　ダダ　デァデァ　トート　トトー　トットー　トトヤン）；C夫系（オト）；D亭主系（ゴテー）；Eオトーサン系。

親の呼称としては、父と母はほぼ平行的な敬意度を示す。「お母さん・母」についての研究も尾崎（1989）、松本（2013）などのように多いが、本稿では参考程度にとどめる。

井上（2015.9）、井上他（2022）、Inoue et al.（2022）では、父親呼称の標準語形であるオトーサンのみに着目して分析した。京阪神以東の広い範囲をグロットグラムで考察し、世代差が大きく、オトーサンが高年層には少なく、若年層には多く分布すること、京都と東京の近くに多く、東北地方には少ないことを見出した。話者の生年絶対年代を基準に、ゆるやかな周圏論的伝播過程が読み取れたが、都市化による遅速の違いがあり、地方的周圏分布、つまり二重の雨傘モデルが適用される（井上1998.1、2011.12）。

本稿では、オトーサン以外の語形の分布を見るために、敬意度に従って語形を大きくまとめる。細分した語形は、各報告書の原図で確認される。

以下では「お父さん」の呼称の実例をもとに論じる[2]。多種の親族呼称のうち「お父さん」を選んだのは、家父長制的社会構造の象徴と言える語で、実地調査でも回答が得られやすいことによる[3]。本稿は井上（2015.9）と同一データの発展的分析にあたる。オトーサンは標準語だろうが、オトーチャン、トーサンなどの語形は共通語と認められる（井上1998.1）。オトーサンという標準語形がきれいな結果を示すとしたら、それよりも少し敬意度の下がる中間段階の言い方もきれいな比例関係、連動関係を示すだろうか（松本2013）。今回の分析ではダダ、アヤなどの方言形も高年層で観察されたが、若い世代には見られない。もはや地域独自の変化は生じない。つまり下からの変化としての典型、新方言は見られなかった。

結果を先取りして述べると、オトーサンの普及と同時に、オヤジとパパの普及という２極化が観察された。パパは国際化・欧米化への動きと位置づけられる。井上（2015.9）のオトーサンという標準語形のみを追った分析では出てこなかった変化である。

１.２　実時間・見かけ時間・記憶時間・空間時間

社会言語学が言語変異に関心を抱きはじめたときに注意を払ったのは、年齢差だった。初期には《若い世代の使う言い方は新しい》という単純な対応・比例関係を前提にした。しかし例外もあるので、年齢を基準に過去の変化を推定する発想は「見かけ（の）時間」apparent timeと名付けられ、「実時間」real timeと区別すべきことが指摘された（Chambers & Trudgill 1980）。その後「年齢階梯」age gradingや「成人後採用・後期習得」late adoption、「加齢変化」ageingなどの現象が見つかり、年齢と言語変化には複雑な関係があることが分かった。ことに《敬語の成人後採用》は、言語変化の若年層採用という従来の常識をくつがえすものだった（井上2015.2）。柴田武の「社会的活躍層」の共通語形早期採用は、その先鞭を付けるもので（柴田1978）、「言語年齢学」という独自の研究領域の可能性につながる（井上2008.5）。本論文では、時間概念の拡張・発展として「**記憶時間**」を提唱する。

---

[2]「呼称」address termに調査対象をしぼった。名称・言及称reference termが調査の場面で混じることがあったら、再質問するように、調査票で指示した。ただし2.3節注で後述のように東北地方や北陸地方では家庭内の呼称が集落全体で共有され、言及称としても使われることもあるので、無理な追求はせず、作図の際も調査票の記入をそのまま図化した。

[3] 国立国語研究所（1989）の中でも、かなりのページ数を占める。

そもそも方言地理学の発展において、個別を見るか、抽象化して全体把握を目指すかというジレンマが存在した。眼前で進行中の言語変化language change in progressを見るためには、グロットグラムglottogram（地理×年齢図）が有効である（井上2014.12）。言語地理学の地理的分布から過去の言語史を推定する技法と結びつけることができ、その代表としての周圏論的分布（ABA分布、辺境残存の原則）は、「空間時間」と位置づけることができる。方言地図とグロットグラムでは、個々の話者から得られた答を忠実に表示する。そのために分布パターン全体を読み取る必要がある。その際「単語は各々独自の歴史を持つ」というテーゼに従って、語形にも（丁寧さや改まりの程度のような）順番を付けないことが多かった。ただしレーベンシュタイン距離の計算と適用が象徴するように（Heeringa 2004）、すべての語形に数値を与えた上で地理的分布を考察する手法も開発された。この場合、個々の語形の違いは捨象されるが、そのおかげでもっと大きな流れが見えることがある。一方社会言語学的な大量調査では、年齢、性、学歴、生育地などの外的基準を使い、平均値などの数値を使って（有意）差を確認し、個々人は捨象される。本稿では、「お父さん」に関わる全語形を数値化して考察する。個々の語形（接辞）を個別に扱うのでは、大きな流れを把握することが困難と予測されるからである。後掲のようにグロットグラムを点数化し、集計することにより、パターンの異同と変化方向が容易に把握できた。

2　グロットグラム調査の概要

第2節・第3節ではグロットグラムで実時間の動きの分かる貴重な例として、滋賀県湖東地域の例を検討する。

2－1　「お父さん」のグロットグラム前史

井上（2015.9）で、グロットグラムによって「お父さん」の呼称の分布と変化について論じた。紙数の関係もあり、オトーサンという標準語形のみにしぼった。見かけ時間としての年齢差によって標準語形の普及過程が読み取れた。記憶時間を利用して昔（子どものころ）と今の呼称を尋ね、比較した。相違・対立が浮き彫りになり、手法の有効性が示された。理論的には、実時間、見かけ時間以外に、記憶時間、空間時間という概念を区別した。4種類の時間によって、多様性・変異を見たことになる。

２－２　湖東グロットグラムの原図

図２－１に滋賀県湖東地域のグロットグラムを再掲する（井上他2011）。後掲図３－２の原図にあたる。以下のグロットグラムでは縦軸で地理的位置を示す。鉄道沿いの調査で、駅ごとに一行与え、地元の協力が得られない区間は空白行を入れた。横軸に話者を生年に従って示す。言語変化の方向性を示すために若い世代を右側に配置した。

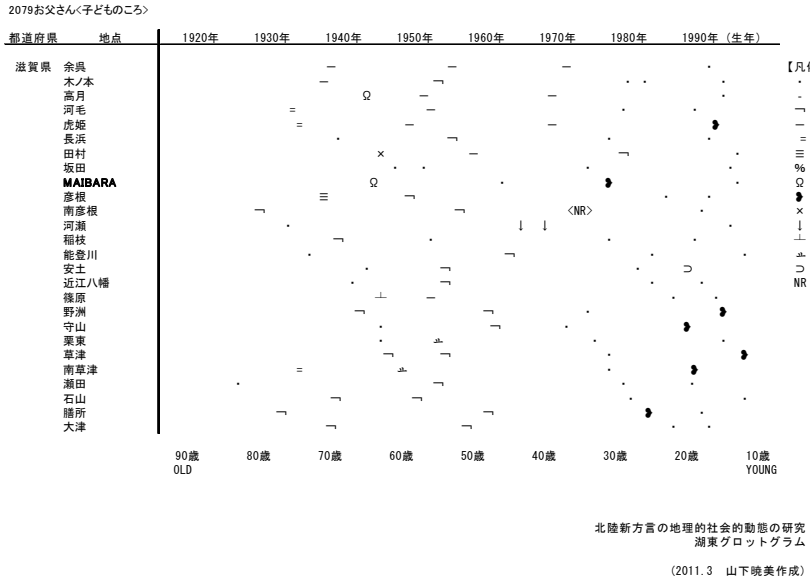


図２－１　湖東グロットグラム　「お父さん」昔（2009）

方言調査では方言形の地域差に注意を払うことが多いので、標準語形・共通語形は目立たない記号で表されることが多い。この図では、オトーサンはピリオドで示してあり、ほぼ全域に分布するように見える。パパ❤が京都付近の若い世代に散在し、オトーチャン ㅋ が中年層に多いことも読み取れる。トーチャン ー は滋賀県北部に多い。従来の図の読み取り方は以上のようなもので、図上で目立つ語形、数の多い語形に着目することが多く、全語形を満遍なくしかも順番を付けるような形で解説することはまれだった。この図だけから大きな流れを読み取ることは難しい。

これまでのグロットグラム報告書は解説なしで出版されることが多かった。

方言地図と違って、地域差・年齢差ともに自明で、説明を必要としないと考えられたからである。しかし「お父さん」は語形が多く、しかも後述のように敬意を示す接辞に順番があると考えられ、変化の方向とも関連すると思われる。解説が必要だが、適切な解説には適切な表示法（記号の選択など）が有効である。図上の分布を見るのみでなく、理論的見通し、位置づけも必要である。

２－３　グロットグラムと語形の点数化

本稿第４節以降では、京都から北海道にかけての広い地域において、他の語形についても考察を拡大する。ただし個々の多様な方言形については詳説を避け、敬意を示す要素を使って、単純化を試みた。語形を**５個の系統に分類**し、ほぼ敬意の順に５個の値を与えて考察する。また５個の値を数値とみなしてグラフに表し、北海道から京都にかけて、年齢差・地域差の大傾向を探る。

調査の概要や調査質問文などについては、井上（2015.9）で述べた[4]。元の報告書所収のグロットグラムでは多様な記号を用いて全回答を示したが（井上2003.3、2008.3、井上他2011.3）、本稿では語形を点数化し、簡略化して提示する[5]。**表２－１**の方式による。出発点・デフォルトとして父親への呼称が出たら１点とし、接辞オ～が付いたら＋１点、チャなどが付いたら＋１点、チャンなどが付いたら＋２点、サンなどが付いたら＋３点、サマなどが付いたら＋４点（実例は湖東の一人のみ）とした[6]。従ってオトーサンは１＋１＋３で５点になる。トー、ダダ、アヤなど多様な呼称を同列に１点と扱った。オヤジとパパも１点とした（オヤジは北陸では敬意の高い言い方だった可能性もあるが、現代共通語の語感を適用した）。オトンとトーチャがともに２点になり、オトッツァンとトーサンがともに４点になるなど、問題がありうる。しかし５点と１点の中間点として位置付けると、大きな誤差は生じない。従来の方言地理学の手法だと、接頭辞と接尾辞を別に扱い、「オ」の有無による分布図を作成し、それと

---

[4] 東日本の方言では、呼称がそのまま集落内で名称（つまり言及称）としても使われる（国立国語研究所1986）。よその人に向かって「チチ」を言及するような謙譲語としての用法は近代東京に根差すもので、今回のような調査文では出てこない。

[5] 本稿での点数は、これまでの諸方言の親族呼称の研究を踏まえたもので、順位尺度に相当する。語形の変化過程、地理的分布による語史の推定、集落内の社会階層との対応など、多様な基準を総合的に勘案した。地域によりとらえかたが違うという懸念があって、長らく数値化しなかったが、各地の報告をみても、本稿のような大まかな分類には共通性があると、判断された。さらに細かくもできるが、迷いが少ないように5段階にした。京都方言などの「おもうさま」などを含めると、段階はもっと多くなる。

[6]「ツァツァ」は「トト・ダダ・ナナ」などの繰り返し語形と同じと見て、1点にした。

別に「サマ」「サン」「チャン」「ツァン」「ハン」「マ」などの分布図を作成するところで、図の照合に手間がかかる。しかし井上（2015.9）ですでに標準語形オトーサンだけに着目して考察を終えたあとだったので、接頭辞と接尾辞に細分するのを避けて、１次元の点数で表わすことにした。

表２－１　接辞の点数化

1			トー　ダダ　アヤ　オヤジ　パパ　他
＋ 1	オ		チャ　ツァ　ン
＋ 2			チャン　ツァン
＋ 3			サン　ハン
＋ 4			サマ

接辞の点数は、さまざまな方言記述（1.1参照）を参考にして与えた。集落内の社会階層との連動し、また発話（文）内で敬語と呼応する現象（「お父さんがいらっしゃる」、「父ちゃんがくる」など）を元に、適切さを検証できる。

個々の語形に様々な記号を与えて、視覚的に敬意の接辞と対応するように工夫すれば、もっと大量の情報を示せる。例えば同じ１点のダダ、テデ、トド、トート、などがどの県に分布するかなどを（第４節解説のように原図に戻ることなく）示せる。しかし記号の数が多くなれば、いちいち凡例と照合する必要が生じる。本稿のように５段階に抽象化して作図することによって、細部にこだわらずに大局を把握できる。

なお図４－１～図５－３のグロットグラムの凡例を**表２－２**に掲げる。１点にあたる各地の俚言は多様なので、一部を示した。個々のグロットグラムで出現語形に与えた点数は、以下の図の凡例で示す。

表２－２　凡例　語形点数の記号化

点	記号	代表語形
1	－	ダダ　オヤジ アヤ　パパ ツァツア トート

2	＋	オッツァ オトン オド	トーチャ トチャ ダダチャ
3	＃	オトーチャ オトッツァ	トーチャン ダダハン
4	▼	オトーチャン オトッチャン オトッツァン	トーサン
5	■	オトーサン	

２－４　グロットグラムの地域の配列

第４節以下では、３地域のグロットグラムを各１ページに示す。全体として、日本列島の中で台形を斜めにして片方を伸ばした形の地域で（井上2015.9）、福島県から北へ青森経由北海道に至り、日本海縦貫線ぞいに青森から京都までをつなぐ（Yamashita & Hanzawa 2010）。図４－１と図５－１が「TH（東北・北海道）調査」で、福島県から東北太平洋岸を、青森・函館を経て、北海道中央部に至る。図４－２と図５－２が「日本海調査」で、青森県から新潟県にかけて日本海ぞい、図４－３と図５－３が「北陸調査」で、富山県から京都府にかけての日本海ぞいである。京阪から東京にかけての東海道Ｑ調査が、太平洋側で全体をつなぐ。

以下の解説は、実は多数の図全体を見通した上で執筆した。グロットグラムの視察だけからは読み取りにくいことにも言及している。

３　湖東の「お父さん」の実時間比較

３－１　湖東グロットグラムの「お父さん」の実時間比較

グロットグラムでは、年齢差という見かけの時間を利用するが、言語変化をとらえるのに重要な実時間の手がかりがない。しかし幸いなことに、「北陸調査」と付随して行った「湖東調査」の地域は（山下・半沢2008）、「東海道Ｑ調査[7]」の一部と重なり、調査時期が約20年ずれている[8]。しかしグロットグラムの記

号がまったく違うので、比較が困難だった。語形の種類が多いのでなおさらである。東海道Q調査と湖東グロットグラム双方を、「お父さん」語形の５段階の敬意によって、第３節以下と同様に記号化した。敬意の高い接辞のついた言い方を大きい黒の記号にした。なお２回の調査で重なっている地域を示すために、米原と大津に横線を引いた。

以下に３枚のグロットグラムを掲げる。図３－１と図３－２は調査時期が約20年違うので実時間の違いを示し、図３－２と図３－３は記憶時間による過去（子どものころ）と現在の違いを示す（図３－２と図３－３の下端には、後述北陸調査の京都府の２地点を追加した[9]）。

期待と逆に、一番古い段階を示すと思われる**図３－１**の東海道Q調査（1986－1988調査）の昔（子どものころ）の言い方は、敬意度の高い５点オトーサン■と４点オトーチャン▼が多い。

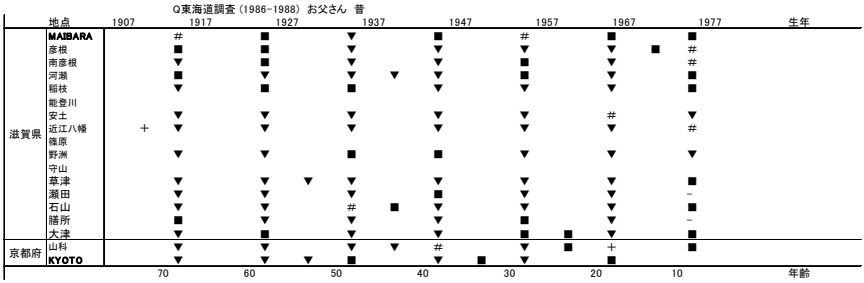


図３－１　東海道Q調査湖東部分　「お父さん」昔（1986 –1988）

図３－２は、約20年後、2009年の湖東調査の昔の言い方で、**図２－１**の記号を置き換えたもので、横線より下、米原以南が東海道Q調査との共通地域である。

1970年以降生まれの若い世代に、５点■オトーサンが急に増えた。1970年以前に生まれた中年以上の世代は大部分が４点▼のオトーチャンの使用者で、オ

---

[7]「東海道Q調査」はほぼ現在の東海道本線ぞいに行われた調査である。当初関西（Quansai）地方の共同研究を出発点にしたので、Q調査と名付けた。

[8] 半沢（2017）は、実時間の変化をみるために行われた研究である。なお京阪地域は、グロットグラム調査適用では出遅れたが、同一地域での調査例があるので、実時間の対比研究は可能である。

[9] 従って第４節と第５節の北陸グロットグラムの数値化による全体集計と、第３節の湖東の全体集計とは、京都府の２地点を二重に数えることになる。図３－４、３－５と図６－３、６－４のグラフを１枚にまとめないのは、そのためもある。

トーサンとの混在の割合は図３－１と同じ程度である。全体の割合としては記憶時間の信頼性を示す[10]。ただしオトーサンの地理的分布は図の中央部の都市化の進んでいない地域で、図３－１と一致しない。

図３－１と図３－２では、「昔の言い方」という記憶時間を活用したことによって、例えば70代話者にとっては60年近く前の言語使用を知ることができ、実時間による20年ほどのタイムスパンをさらに広げることができた。ただし、言うまでもなく、若い世代にとっての「子どものころの言い方」はほんの（数）十年ほど前の言い方である。

図３－２を後掲広域の図４－１、４－２、４－３と比べると、黒っぽい記号が多く、敬意が５点と４点の言い方が圧倒的に多く、中間段階が少ないと読み取れる。第４節以下の東北地方などと比べると、滋賀県は京都に近いだけに敬意の高い表現が普及していたとみてよい。京都に近いほど５点オトーサンが多い傾向は、「空間時間」による周圏論的な推定につながる。なお図３－３を後掲広域の図５－１、５－２、５－３と比べると、地域差は薄れた。

図３－３の一番新しい段階の、2009年の湖東調査の今の言い方は、後述の東北地方や北陸地方と比べると、敬意度の高い言い方が多く、両極端の言い方が増えている。５点■オトーサンが1970年以前に生まれた中年以上の世代にも普及した。４点▼オトーチャンは、ほぼ姿を消す。1970年ころ共通語化が進み、中年以上の世代の生涯のうちに子どものころはオトーチャンと呼んでいたのが、

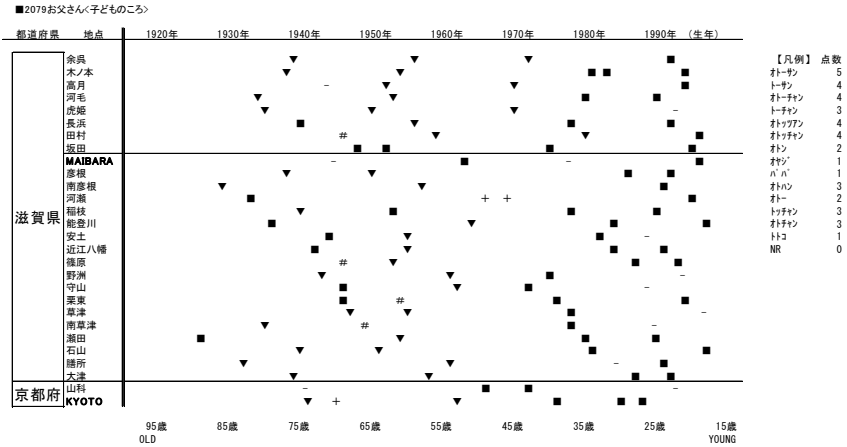


図３－２　湖東グロットグラム　「お父さん」昔（2009）

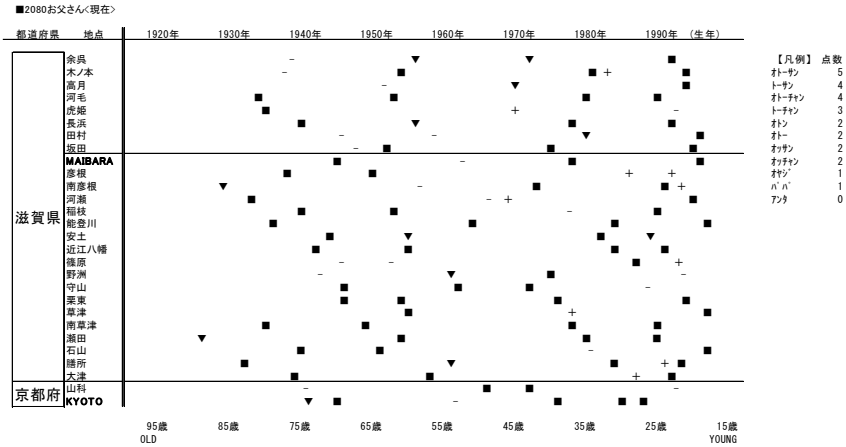


図３－３　湖東グロットグラム　「お父さん」今（2009）

成人後オトーサンに変わったとみられる。その一方で敬意度の低い１点オヤジと１点パパも多くなった。このような生涯変化を追跡し、復元するのに、以前の記憶を聞く「記憶時間」の技法は有効である。

３枚のグロットグラムそれぞれで世代差も見られる。右側の若い世代に５点のオトーサンが多いのは、年齢差に基づく見かけ時間による違いである。

３－２　湖東のグラフによる「お父さん」の実時間比較　２極化

以上では従来の手法で個々のグロットグラムの視察により考察したが、主観的・印象的把握である。各語形を（親族呼称に関する諸調査の結果を踏まえて）５種類に分けたのだから、数を数え、積み上げ棒グラフにした[11]。**図３－４**参照[12]。

1980年代後半の東海道Ｑ調査の昔の言い方（記憶時間）から、2010年代直前の湖東グロットグラムの昔の言い方を経て、湖東グロットグラムの今の言い方にかけて、黒の５点オトーサンが順調に増える。中間段階の４点オトーチャン

[10] 記憶時間のデータは、数十年後に調査しても同一年代に生まれた人で一致するはずである。分布に不一致が見られた理由としては、調査員が図3-1では東京外国語大学の学生、図3-2では地元出身の若い社会人だったことが考えられる。岡崎市の第1回敬語調査では、東京から来た調査員（proper or professional）と地元の大学生調査員（control or college）相手で、得られた答えの敬語の度合いに差があった（井上2015.2）。

[11] 滋賀県湖東以外に京都府２地点も算入した。

[12] 井上(2015.9)、Inoue et al. (2022) と同じ図を再掲する。

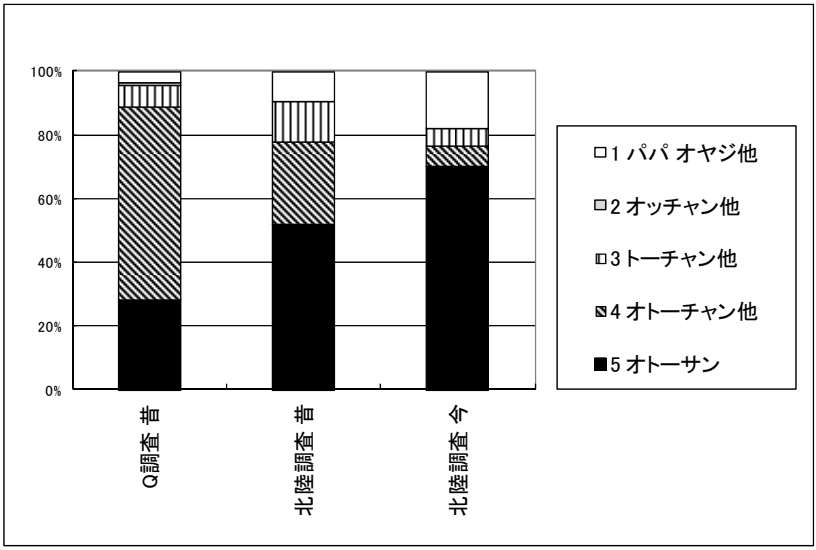


図３－４　湖東２回の実時間調査（1987ca & 2009）

などが減少した。一方１点のオヤジ、パパなども増え、両極端の言い方に**２極化**した。この２極化を頭に置くと、第４節以降の分析の変化傾向が読み取りやすい。なお図３－４は全年齢層の割合なので、後掲図６－1ab～図６－3abの４年齢層別の柱全部の割合を示すグラフ（本稿では省略）に対応する。

平均点でいうとオトーチャンが中間の言い方である。後掲の北陸や東北で平均２点から４点の間でぶれることと対照すると、湖東地域の呼称の敬意度は高い。また後掲のグラフに比べると、東海道Q昔、湖東昔、湖東今の３種の数値のずれ・変動が小さい。昔（子どものころ）の言い方は、東海道Q調査でも湖東調査でもあまり変わらない。２回の調査でまったく別の話者であることを考えると、記憶時間の情報は信頼できると考えられる。一方湖東調査の昔と今の数値は、若い世代で離れる。1970年ころを境に若い世代で変化があったことを意味する。

一般的な期待（予測）に反して、今の言い方と昔（子どものころ）の言い方の敬意の度合いが変わらないのは、前述のように、オトーサンとともにパパやオヤジなどが増えたためである。つまり「お父さん」系の呼称によって、その接辞の選び方によって社会階層差を示すような呼称システムも進出しつつあることを示す。家族内の敬語使用の変化とも連動し、家族成員間の社会心理的力

関係が変化しつつあることの反映ととらえることができる。鈴木（1973）の概括と違って、目上の家族に親族呼称以外（人称代名詞や名前）で呼びかける動きとも関わる。「敬語の民主化・平等化」の表れとしてまとめることもできる（井上2011.12）。

中立的なパパまたはオヤジを呼称として使うのは、お父さん系列の接辞の敬意に左右される言い方を逃れるもので、敬語回避（ネウストプニー他1996）、接辞回避とも言える。呼称としてのパパは幼児語の色彩も帯び、成人後使われなくなる。しかし戦後着実に使用を増やしており、新方言に類した下からの変化として、さらに進出することが予想される（別の新出外来語形ダディーの進出と競合するだろうが）。なおパパ、ママにも接辞付加は可能で、「パパさん、ママさん」は複合名詞の一部として使われるが[13]、呼称としてはまれである。方言のダダやナナにサンが付かないのと平行的である。中産階級にふさわしいオトーサン以外に、オヤジ、パパの選択により、呼称が２極化したといえる。

以上で滋賀県湖東を舞台に、実時間の異なる二つの調査を対照した。「昔（子どものころ）」と「今」の結果（見かけ時間）が大きく違い、最近の変化がうかがわれた。また２度の調査結果がほぼ一致したことで、記憶時間の有効性・信頼性が確かめられた。

３－３　湖東のグラフ「お父さん」の数値化

図３－５では、図３－４の集計をさらに細かくし、年齢層別に考察する（グロットグラムの地域差は無視する）。湖東調査ではほぼ20歳きざみで４世代を調べたので、約20年前のＱ調査の10年間隔７世代のデータも、20年きざみにした。図３－５では生年実年代（コーホートcohort）で配置したために、Ｑ調査の70代は左に出る形になり、Ｑ調査10代の数値は湖東調査30代の位置に示される。

図３－４をさらに抽象化して、３本の棒の（１点から５点までの）平均点を出したが、大きな違いは見られなかった。全体として４点前後になる。つまりオトーチャンが平均的な言い方である。またはオトーサン優勢の中にパパなどが混じる。５点と１点の両極端の言い方が相殺しあったためである。数値化によって大局を把握できることもあるが、場合によっては失われる情報もある。

---

[13] 国会図書館近代デジタルライブラリーによれば、パパの初出は《文壇随筆中村武羅夫著(新潮社1925)目次:「パパ」「ママ」を難ず》で、否定的論調である。また《杉村広太郎著(朝日新聞社1929)目次:パパさんママさん》で接辞サンの付く例が論じられている。なお日本国語大辞典の初出は1910年夏目漱石『門』である。

井上（2015.9）で標準語形としてのオトーサンだけを扱ったときには、はじめから語形を１種に絞っていたので、このような問題は出なかった。

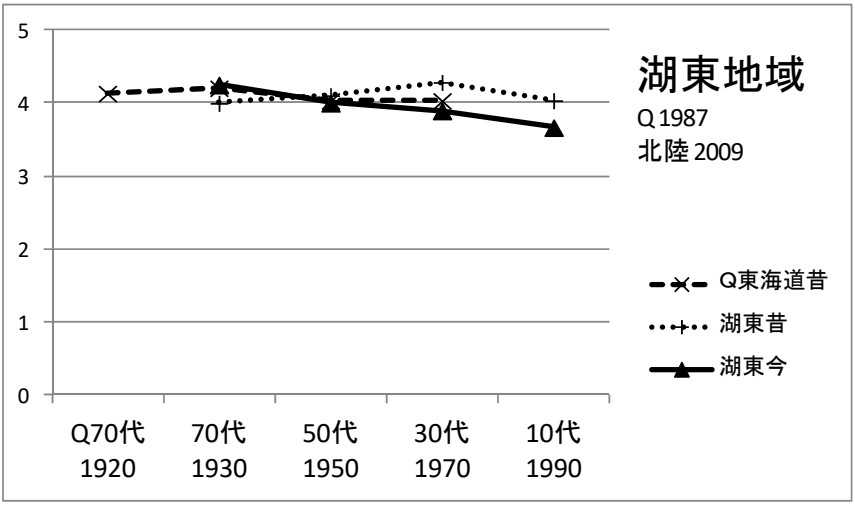


図３－５　湖東２回の実時間調査と記憶時間（1987ca & 2009）

４　「お父さん」（昔）の広域グロットグラム

４－１　「お父さん」昔＝記憶時間　数値化図

第４節以下では湖東を離れて京阪、北陸から北海道にかけての４種の広域のグロットグラムを考察する[14]。記憶時間と空間時間を取り入れる。

まず第４節では、昔（子どものころ）の呼び方（記憶時間）を検討する。以下の図では、前掲湖東と同じく、語形を５段階に分け、記号を統一して、広い範囲の地理的歴史的推移を見渡す[15]。まず全体を大きくとらえると、図４－１、４－２、４－３では、５点のオトーサン■をはじめとして黒っぽい記号が右側の若い世代に集中する傾向が際立つ[16]。白っぽく見える記号ほど京都から遠方の高年層に多く、（オやサンなどが付かないという点で）敬意度の低い語形である。

---

[14] ４調査の相互の地理的位置については井上（2015）に記したので、重複を避ける。県名が手がかりになる。

[15] 以下の図では、原図との記号の置き換えを右上の凡例に示す。原図では回答を忠実に表示したために「お父さん」の語形としてはあてはまらないものもある。本稿のグロットグラムでは空白にした。

[16] 図４－１、図５－１では原図で示されていた多様な語形を５段階に置き換えた。また半沢が描き直して、話者の生年を（10年きざみでなく）１年ごとに忠実にプロットした。

図４－１の東北・北海道では世代差が大きく、若い人は５点のオトーサンを使う。北海道は別格で、全年齢層で５点と４点が多い。方言区画としては道南に位置し、音韻などは祖先の地の東北方言に近いが、呼称では北海道共通語を受容したと見られる。青森県はほぼ10代以下、岩手県から福島県にかけてはほぼ30代以下が、５点のオトーサンを使う。ただ大都市付近ではもっと年上の人も高い点数になる。原図（井上2003.3）に戻って上の年齢層の伝統的な呼称を見ると、青森県は２点のオド、オットーなどが多く、岩手県・宮城県・福島県では３点のトーチャンなどが多い。岩手県では敬意度の一番低い繰り返し語形１点のダダなどが使われる。

図４－２の東北地方日本海岸では、５点オトーサンの記号が10代（1985年前後生れ）の若い世代に偏る。原図（井上2008.3）に戻ると、上の年齢層には多様な伝統的方言形として、敬意度の低い繰り返し語形ドド（秋田県）、ダダ（山形県）、トド（新潟県）などが使われる。

図４－３によれば、北陸では５点オトーサンが壮年層にまで広がっている。原図（井上他2011.3）に戻ると、中年以上で１点の言い方は少なく、トート、トトが富山・石川に散在するのみである。富山・石川・福井では３点のトーチャンなどが多い。滋賀県（湖西）はことに点数が高く、４点のオトーチャンなどが多い。前述の滋賀県湖東の高さ（多くがオトーサンとオトーチャン）に対応する。敬語の西高東低の傾向に合致し、昔の言い方としては、京都中心の周圏論的分布パターンと解釈できる（空間時間）。

敬意度の高い新しい言い方は、京都・滋賀から北陸を経て広がったように見える。一方逆の動きもある。中年層に多いオヤジ、若年層に多いパパのような敬意接辞なしの語形などである。１点を与え、トー、ダダ、アヤなどと同じに扱ったが、接辞の敬意に頼らない新しい呼称として、別の評価を与えることもできる。

４－２　東海道の「お父さん」（昔）

東海道Ｑ調査の「お父さん」（昔）を作り直し、生年と駅間距離を忠実に示すことができた[17]。井上（2022.3）でも静岡県の分布を示すのに用いた。本稿で

[17] 井上（2015.9）では、オトーサンだけを取り出して、年齢層別に図化した。グロットグラムの改訂は、半沢康が担当した。記号設定は、都染直也氏の紹介により横山和子氏にお願いした。

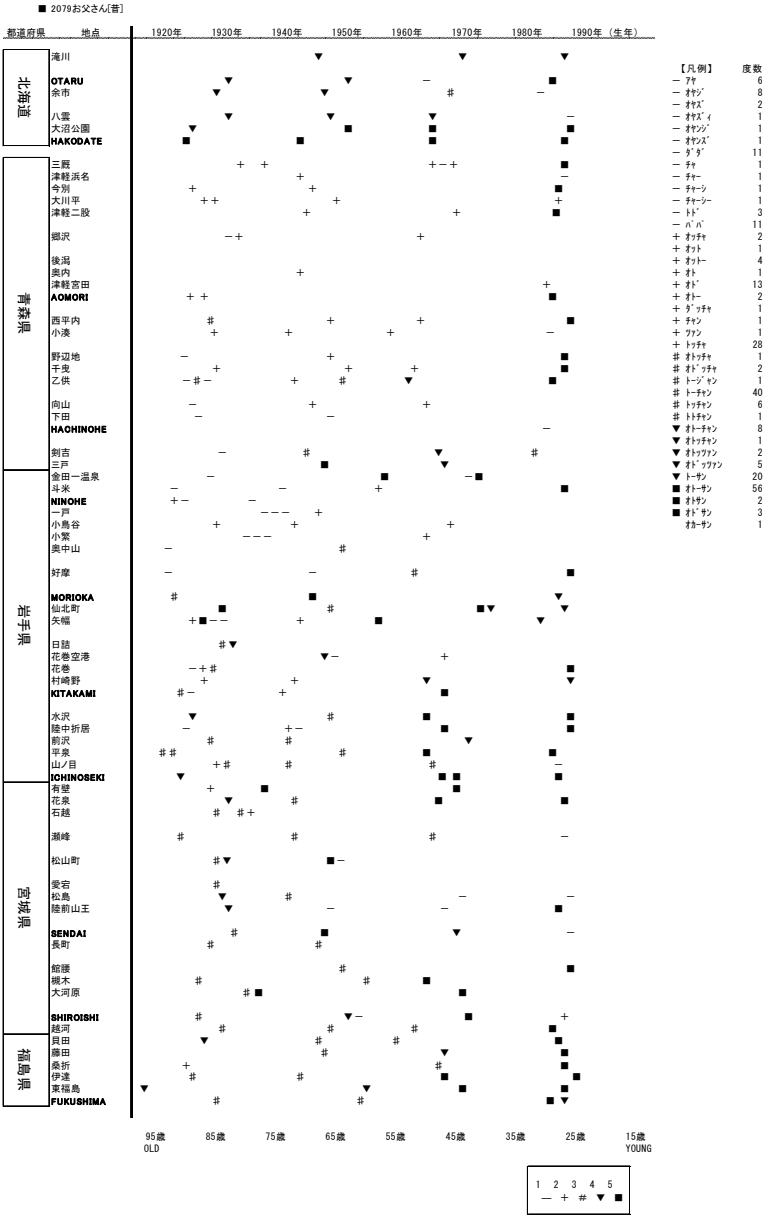


図４－１　お父さん（昔）東北北海道グロットグラム（2001–2002）

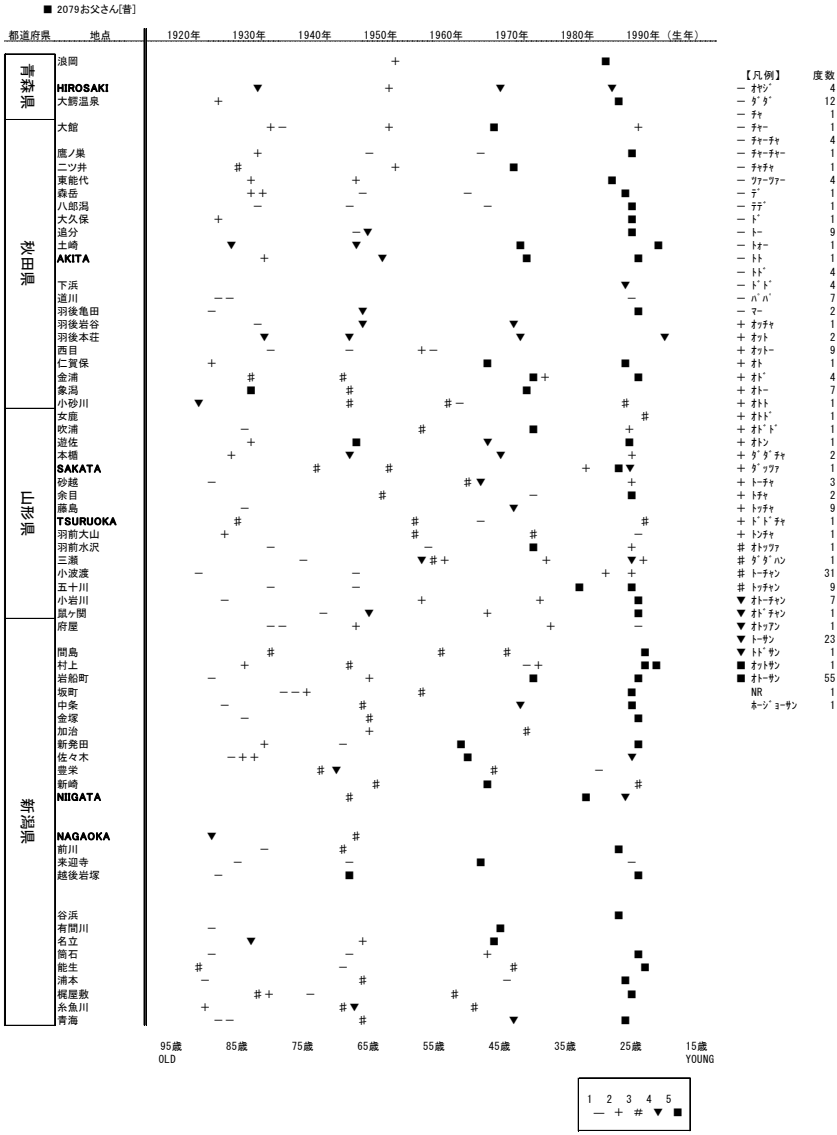


図４－２　お父さん（昔）日本海グロットグラム（2004－2005）

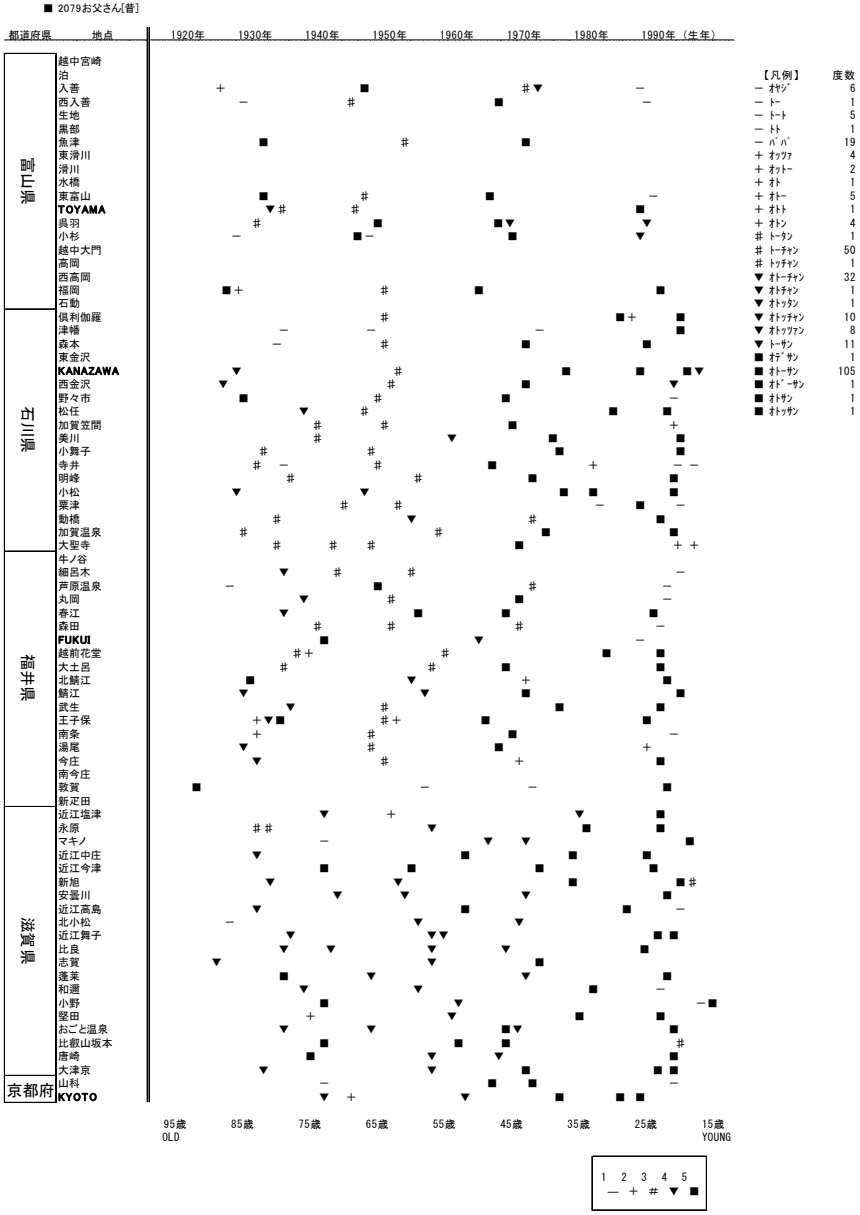


図４－３　お父さん（昔）北陸グロットグラム（2006－2009）

は語形を前半「お父」と後半「さん」に分割して図化し、記号も本稿の趣旨に合わせた。また静岡県以東aと愛知県以西bに分割した。**図４－４、図４－５**の双方で■の個人が、オトーサンの回答者である。若い世代に多いが、中年以上では近畿に多く、東京との中間地域では富士川付近、浜松付近、名古屋付近にも多く、単純な傾斜を示さない。静岡県付近には**図４－４**で■、**図４－５**で□の個人がおり、オトーチャンの多さを示す。双方で□の個人が、トーチャンの回答者で、神奈川県や静岡県島田付近に多い。双方で//の個人が、オトッサンなどで、滋賀県から愛知県にかけて分布する。オが付いて、サン・チャンの付かない形オトーは、掛川付近の高年層に見られる。東北地方などの接辞なしのオド、ナナなどの語形は見られない。各地の若い世代のパパ（14人）は別格である。

大きくまとめると、近畿にオやサンを付けた敬意の高い接辞を付けた語形が多く、中部地方は中間段階の接辞チャン・ッサンなどの付いた語形が多い。つまり東海道全体の接辞使用傾向、ひいては標準語形オトーサン使用傾向は、日本全体の傾向を反映している[18]。

[18] 静岡県については、都市化とも関連するように読み取れる。井上（2022.3）参照。

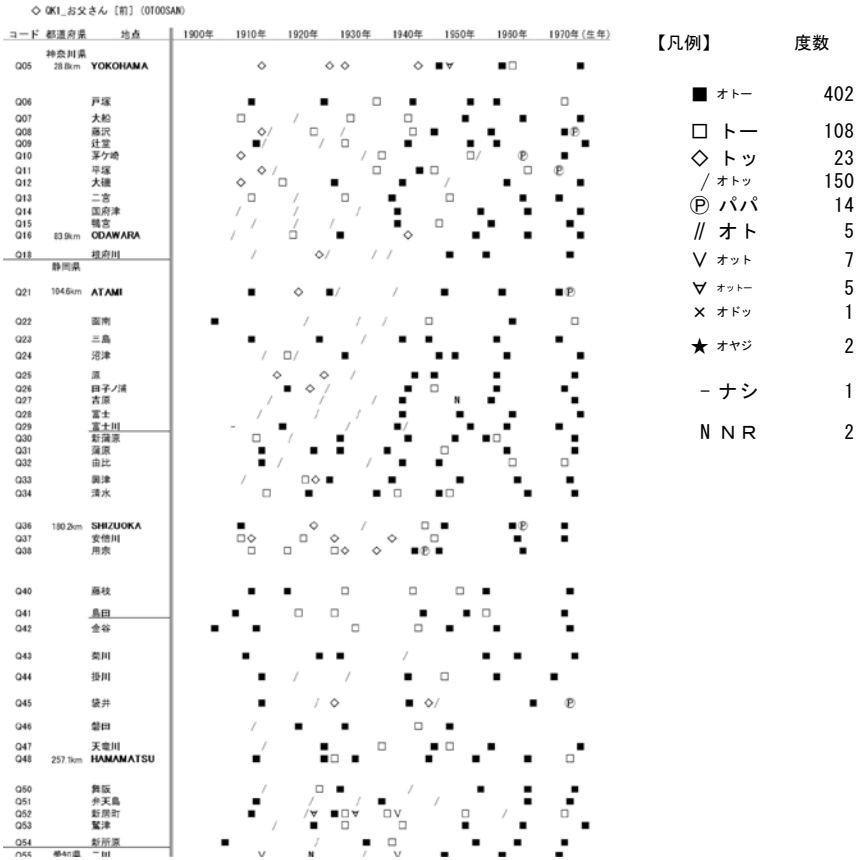


図４－4a　お父さん　前半（昔）

東海道Ｑ調査（1986－1988）　静岡県以東

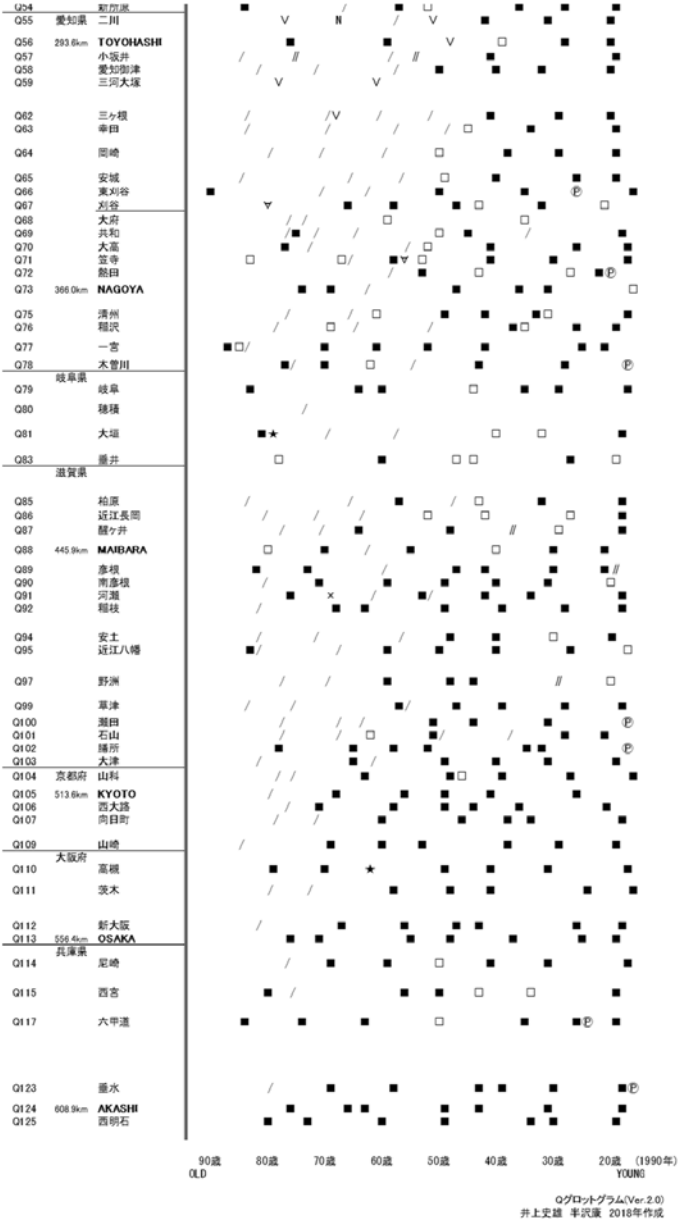


図４－4b　東海道Q調査（1986－1988）愛知県以西

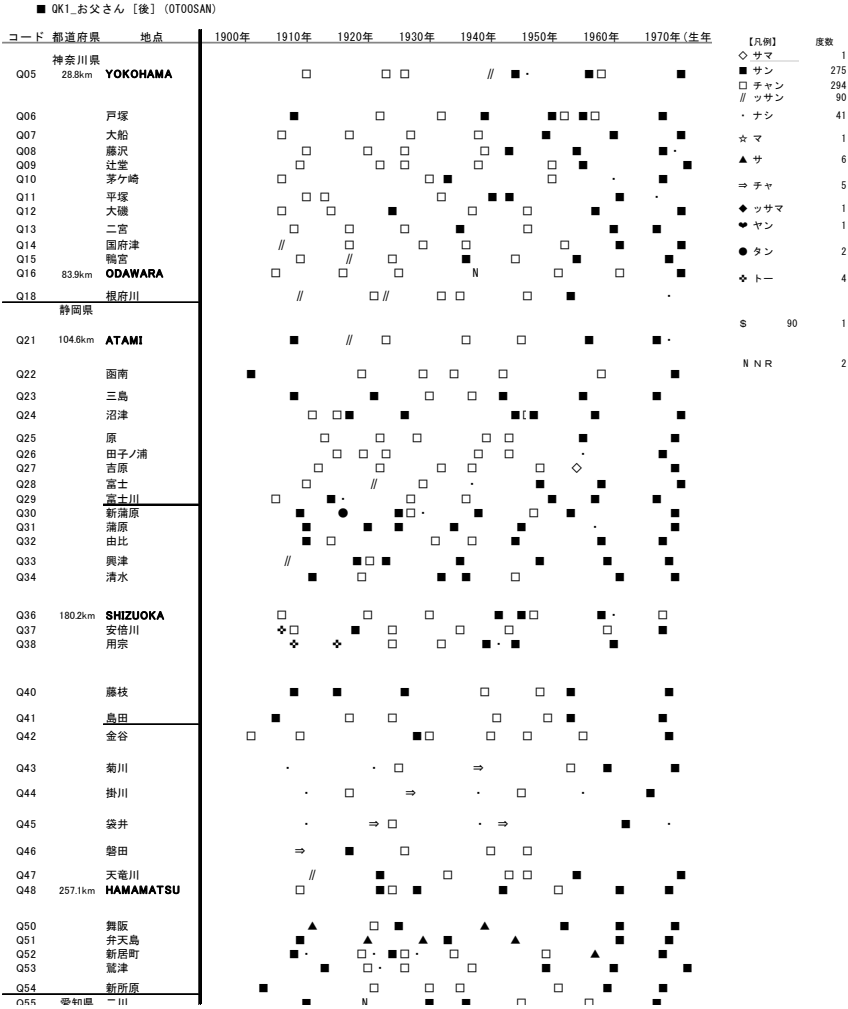


図４－5a　お父さん　後半（昔）

東海道Ｑ調査（1986－1988）　静岡県以東

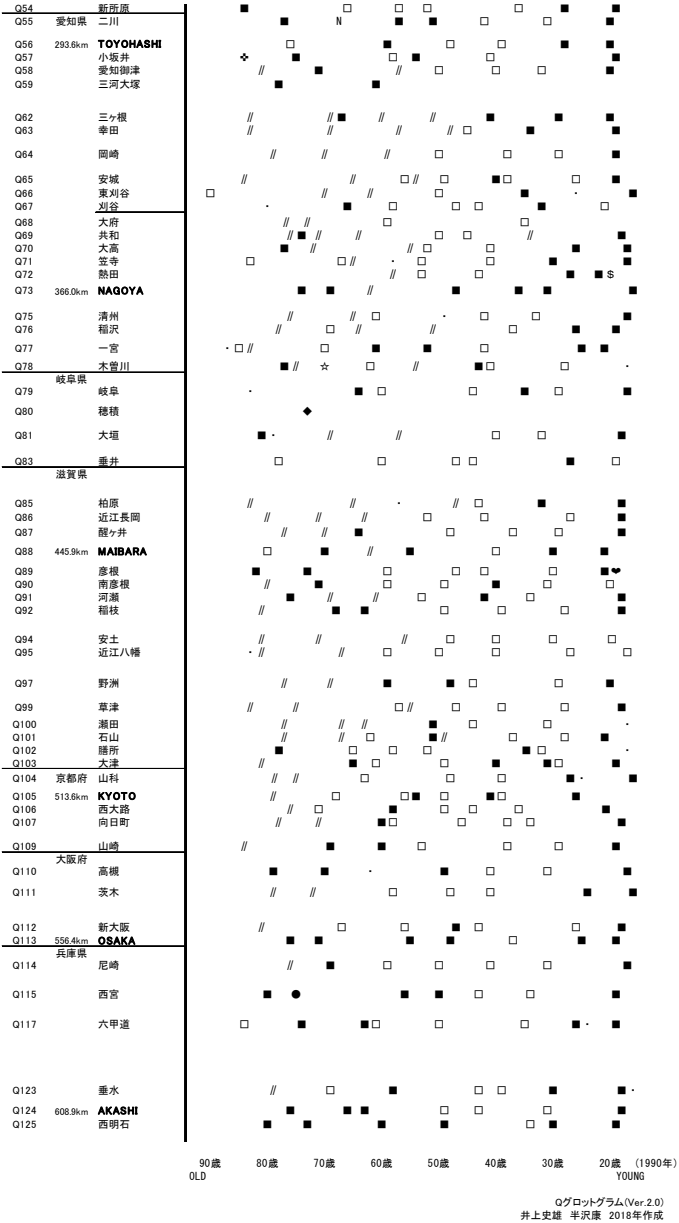


図４－5b　東海道Ｑ調査（1986－1988）　愛知県以西

5　「お父さん」（今）の広域グロットグラム

5－1　「お父さん」今　数値化図

次に「お父さん」の今の呼称について考察する。概観すると、図5－1、5－2、5－3では、5点のオトーサン■をはじめとして黒っぽい記号が全世代に広がる傾向が際立つ。第4節の昔の言い方との違いが著しい。つまり今は標準語形オトーサンをはじめ、敬意の高い呼称が全世代に普及した。記憶時間による調査と対比すると違いが際立つ。記憶時間技法の有効性が示された。

大まかな地域差として、**図5－1**で東北地方太平洋側全体に5点■の記号が分布する。原図（井上2003.3）に戻るとオトーサンである。他に2点トッチャも使われる。1点オヤジもある。

図5－2で東北地方日本海岸にも5点■オトーサンの記号が分布する。原図（井上2008.3）に戻ると、他に4点トーサン、2点オットーなどが散在する。1点オヤジもある。

図5－3の富山県・石川県でも5点■オトーサンが多いが、中年以上（1950年以前生れ）に低い点数が多い。3点トーチャンが散在する。また1点オヤジが多いせいでもある。オフクロ同様の、話者個人EGO基準の呼称とも見られるが、地域社会全体で「○○のオヤジ」のように言及したり呼称としたりする可能性もある。若い世代の低い点数はパパのせいである。今は幼児語的な響きもあるパパを北陸では10代、中学生段階でも残しているようである。

5－2　「お父さん」今昔　全語形まとめ

以上、語形を5種類に単純化して記号化したおかげで、大きな分布傾向が把握できた。また記憶時間による昔と今の違いが分かった。地域差（空間時間）の点では、京都付近に敬意の高い呼称が分布することが分かった。京都に近い滋賀県では昔から敬意の高い接辞が使われていたことが読み取れた。「敬語の西高東低」にあてはまる。以前の多様な記号を使った3枚の広域グロットグラム原図からは読み取れなかった傾向で、敬意の接辞に着目して記号を調整して抽出できた。なお日本海調査と北陸調査の敬語項目についてコレスポンデンス分析MCAを施した結果でも同様な地域差が見られた（山下2013）。

一方、最近の若い世代では急速に共通語化が進み、敬意の高い呼称が（特に東北地方に）普及したことが読み取れた。近代または戦後における東京中心の共通語化に対応する。ただし、共通語化は段階的に進行し、急に1点のダダな

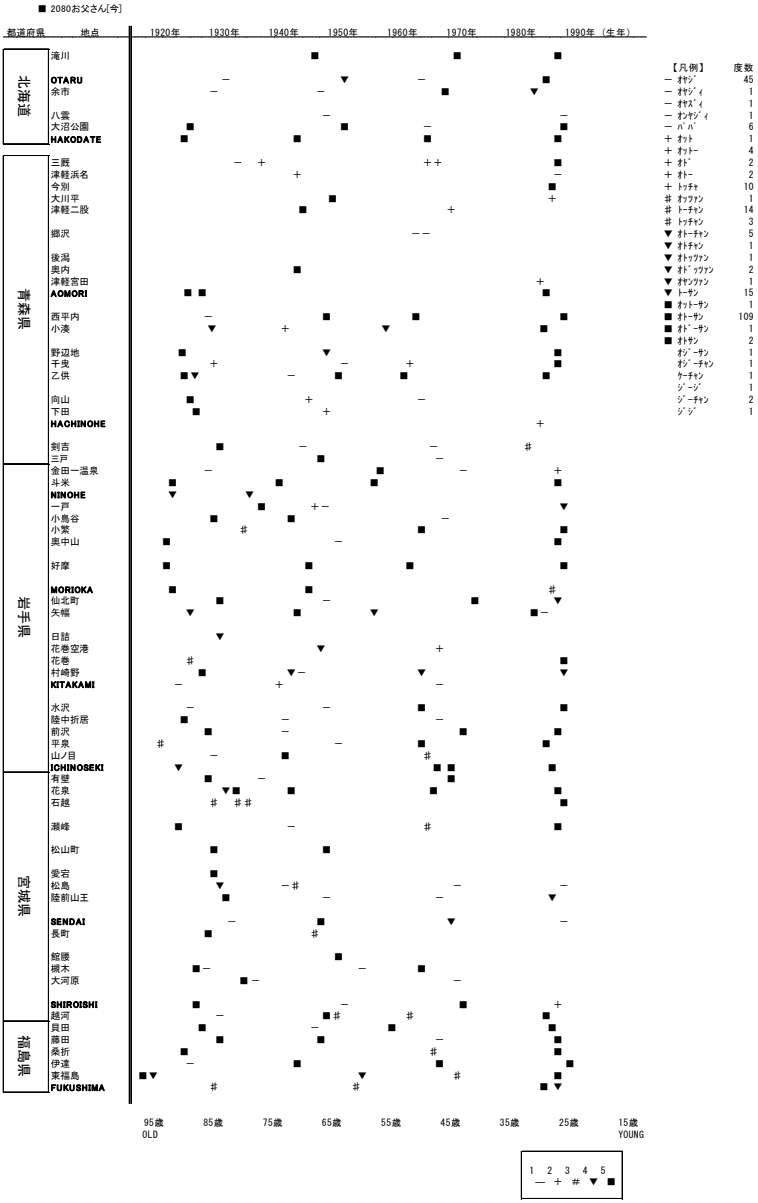


図５－１　お父さん（今）TH東北北海道グロットグラム（2001－2002）

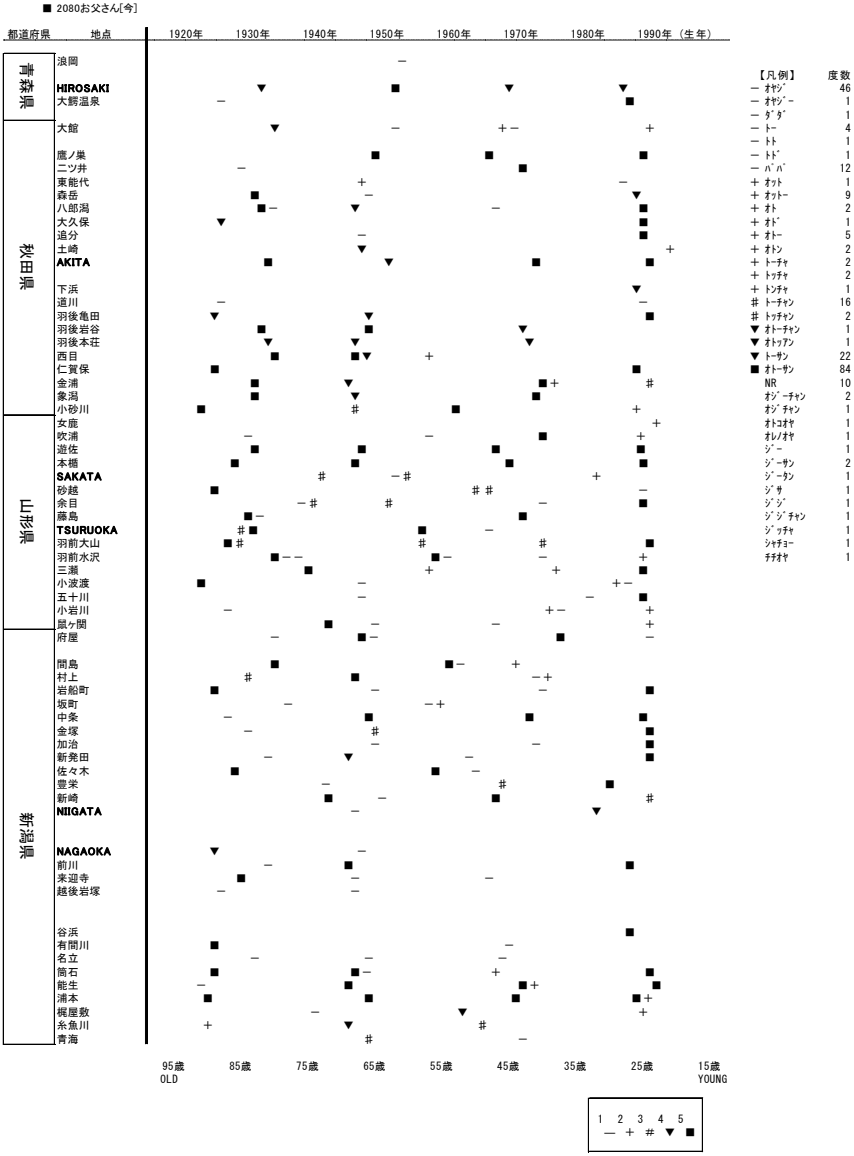


図５－２　お父さん（今）日本海グロットグラム（2004－2005）

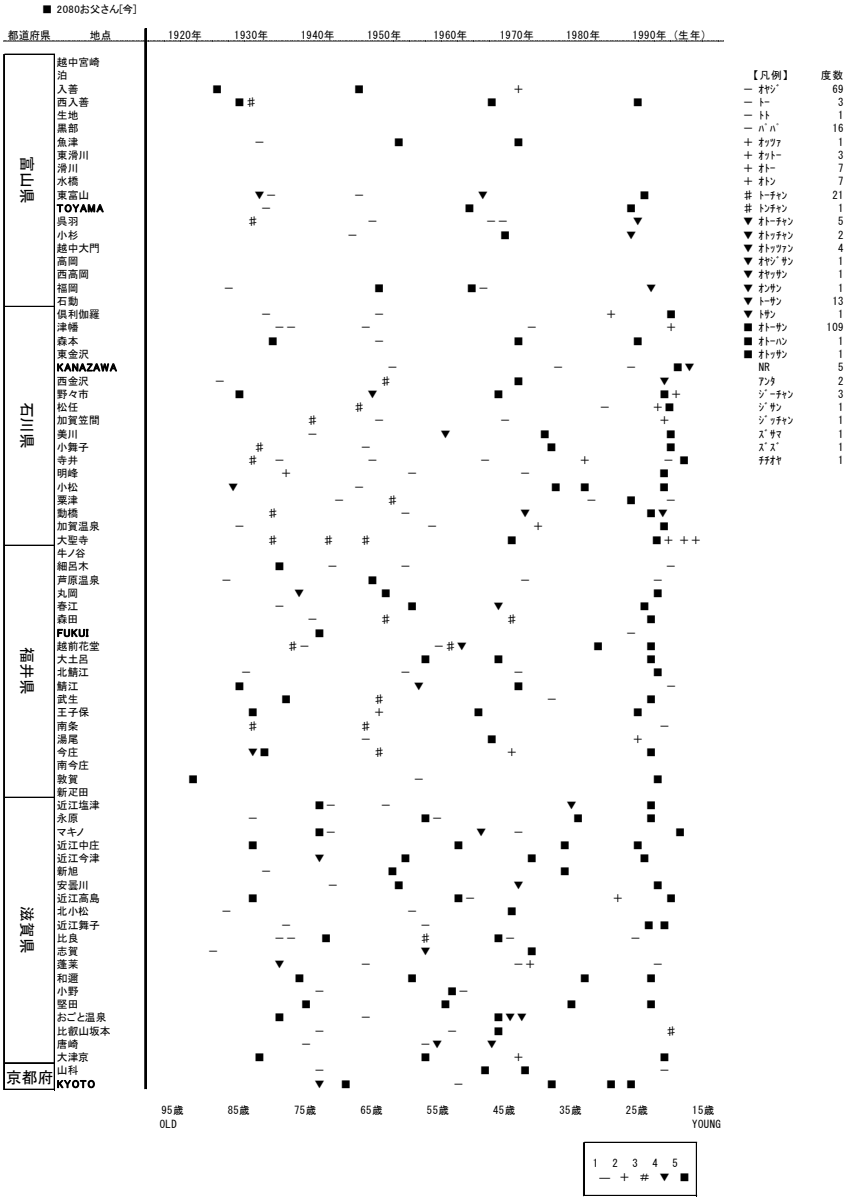


図５－３　お父さん（今）北陸グロットグラム（2006－2009）

どから５点のオトーサンになるわけではない。地域内の社会階層差も関わる（第７節参照）。年齢差（見かけ時間）からも同様の傾向が読み取れた。

敬語の変化の視点からいうと、父親呼称に親族呼称や敬称を用いない新体系の登場が観察された。滋賀県湖東の今の壮年層のオヤジの使用である。サンという接辞の付加は可能だが、実例は少ない。また呼応する敬語動詞からいっても敬意が高いとはいえない。NHK世論調査でも出現した現象である。敬語全体の変化に結びつくもので、接辞による親族呼称の衰退と結び付き[19]、敬語の民主化・平等化と関連する。

６　地域年齢別今昔のグラフによる考察

６－１　広域のグラフ６枚の見方

第４、５節では、湖東を離れて、京阪・東海道・東京・北陸から北海道にかけての４種の広域グロットグラムで、今昔の全体の分布パターンを考察した。細かい地域差・年齢差が分かるが、処理すべき情報が多すぎる。数値化して簡略化すると、相違・類似がくっきり表れることがある。第６節ではさらに、点数化したグラフによって考察する。

図６－1ab～図６－3abの６枚のグラフで全体を見渡す。左aは昔（子どもの頃の言い方）で、右bは今の数値で、記憶時間の対比にあたる。上からの３枚は北海道・東北地方（福島県以北太平洋側）、東北＋新潟県（日本海側）、北陸地方（富山から京都まで）の順で、上述の図４－１、４－２、４－３と図５－１、５－２、５－３に相当し、空間時間にあたる。

黒が５点（オトーサン）で、ほぼ色の濃さの印象と敬意度の点数を対応させた。これは図３－４、図４－１と共通である。白で表した１点の語形の地域差が、読み取りのポイントになる。

左右の年齢別のパターンからみると、右上の図６－1bと右中の図６－2bが他と違って、老若の差が少ない。他の４枚は50代、70代の少なさが目立つ。これと逆に白っぽい１点の語形（ダダ、ナナ、アヤ、オヤジ、パパなど）は、真ん中の図６－2a、bの日本海の今昔のグラフに多い。

白っぽい１点の語形は、東北地方・日本海側などで、高年層の昔の言い方に

[19]「おねえさん、おにいさん、おとうさん、おかあさん、おじさん、おばさん」をはじめとする親族呼称の仮構的使用fictive usageも参照。「パパ、ママ」には、普通名詞化の動きもあるが、使われにくいものや、不快感を与えるものがあり、衰退しつつある。その相違・順番の説明が可能なはずである。

多いが、方言形の呼称（ダダ、ナナ、アヤなど）のためである。北陸地方などでは今の中年層以上に多いが、共通語の呼称（オヤジ、パパ）のためである。

図６－１～３は、先のグロットグラムと比べると、相互に比較しやすい。ただし各図葉内部の地域差・年齢差は捨象され、読み取れなくなる。左右ａとｂつまり今昔の差が目立ち、右の今は５点が多い。特に北陸の今昔は色の濃さのパターンがかなり違う。２、３、４点の中間的な呼称は、昔は多かったが、今は減った。右上図６－１ｂのTH東北北海道では５点に変わった部分が多いが、右中図６－２ｂの日本海と右下図６－３ｂの北陸では、５点と１点に分化した。１点の呼称は昔の日本海に多かったが、今もある程度使われている。日本海と北陸の今の50代以上の言い方にかなり多い。

６－２　広域グロットグラムのａ昔のグラフ

まず左側**図６－1a～3a**昔のグラフをみると、３枚とも右の若い世代の棒ほど色が濃い。５点のオトーサンが多いのみでなく、４点のオトーチャンなどの語形も多いからである。ただ図５－3a北陸は色の濃さのパターンが上の２図とかなり違う。３点のトーチャンなどが50代などに多い。標準語といえるオトーサンの使用率だけからは読み取れなかった傾向で、京都に近い地域では共通語化を早くから進めていたと考えられる。

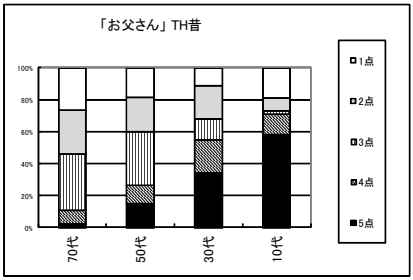
図５－1aのTH東北北海道の昔は、２、３、４点の中間的呼称が多い。ことに50代などに３点のトーチャンなどが多い。東京からの伝播ととらえうる。

これと逆に白っぽい１点の方言形（ダダ、ナナ、アヤなど）は、真ん中図５－2aの日本海の昔のグラフに多い。京都からも東京からも遠い東北地方日本海側が、一番共通語化が遅れていたことになる。これはLAJ、GAJなどの標準語形使用率の総合的分布とも一致し、京都からと東京からの鉄道距離とほぼ比例関係を示す（井上2022.7）。

６－３　広域グロットグラムのｂ今のグラフ

次に右の**図６－1b～3b**今の３枚のグラフでは、世代差が薄れ、老若の差が少ない。年齢別のパターンからみると、右上図５－1bが他と違って、70代に標準語形オトーサンが多くなった。右中図５－2b日本海と図５－3b北陸の今は、中間的な点数の語形が貢献して若い世代ほど黒っぽく見える。

ｂ今の白っぽい１点の語形は、元のグロットグラムに戻って個々の語形をみると、ダダ、ナナ、アヤなどは少なく、オヤジ、パパなどが多い。ことに右下



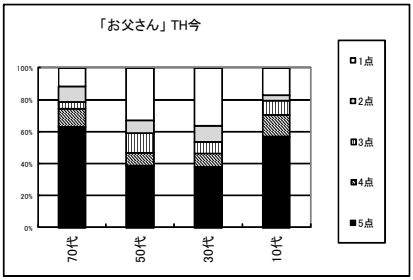
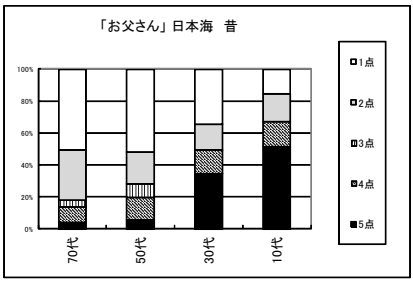


図６－1a　東北北海道の世代差　昔と今（2001–2002）　図６－1b



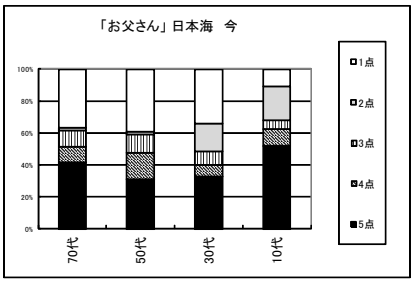
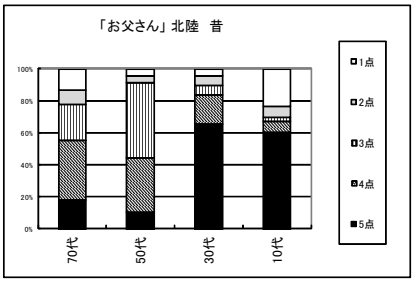


図６－2a　日本海の世代差　昔と今（2004–2005）　図６－2b



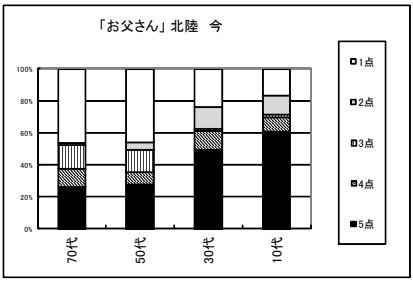


図６－3a　北陸の世代差　昔と今(2006 – 2009)　図６－3b

図５－3bの北陸の今のグラフ（の中年以上）に多い。後述のように新しい変化を示す。

６－４　３地域年齢別今昔の１枚のグラフ

以上６枚のグラフの５段階の数値を見比べたが、相互に対照するのは手間が

かかる。語形を５段階の敬意の度合いに分けたのだから、平均点が計算できる。図６－１のそれぞれの棒ごとに計算し、１枚のグラフにまとめたら、比較が楽で、全体の動きもとらえやすい。**図６－４**では、昔の値を点線で、今の値を実線で示す。マーカーと線は、TH東北北海道を×（細い線）、日本海を△、北陸を■（太い線）にした。

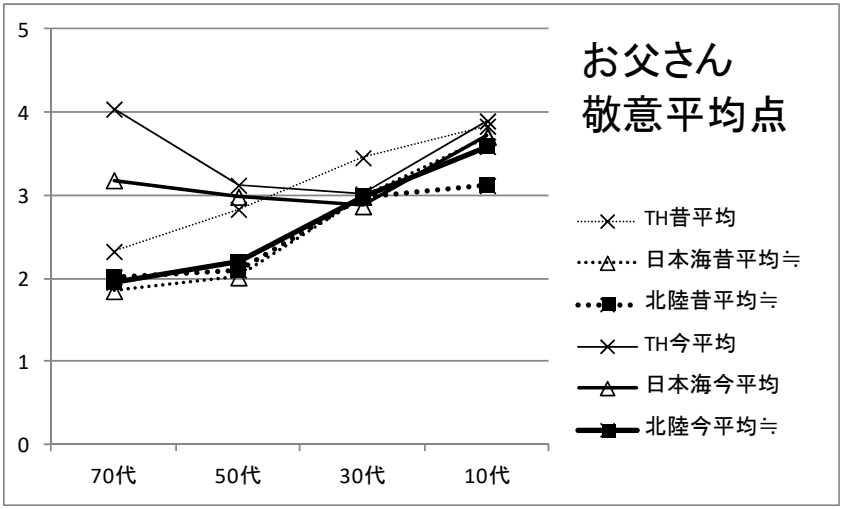


図６－４　敬意平均点　全３地域今昔（2001－2009）

折れ線のパターンは、よく似たものと離れるものに分けられる。似たものには図の凡例で≒を付けた。日本海の昔と北陸の昔、北陸の今が相互に似たパターンである。対照のために図３－６の滋賀県湖東のパターンにも言及する。

(1) まず目立つのは（図６－４左右の）年齢層の差で、「見かけ時間」の作用である。点線の昔は３本とも右上がり（若い人ほど敬意が高）だが、実線の今は東北と日本海が中くぼみである。湖東では全年齢層が４点前後の高さで差が少なかった。

(2) 昔と今の差、つまり（点線と実線の）「記憶時間」の差は、地域によって違う。THと日本海は差が大きく、最近の変化の大きさを物語るが、北陸はほとんど差がない。湖東でも差が少なかった。

(3) （マーカーで区別した）地域の差は「空間時間」を示すが、実線の今はTHと日本海が北陸と離れ、点線の昔はTHが他と違っていた。京都に近い地

域ほど線とマーカーを黒っぽくしたが、敬意の点数が高いわけではない。湖東は、４点前後で敬意の高い言い方が多かった。湖東と比べると、北陸も日本海も東北北海道も、点数が低い。ことに北陸の低さが目立つ。京都に近いので、理屈からいえば敬意の高い接辞が付くと、期待されるのだが、前述のように１点のオヤジやパパが使われるためである。

父親呼称に親族呼称・敬称を用いない新体系の登場は、敬語全体の変化に結びつく。

図６－１～３のグラフに戻ると、図６－3b北陸の今と図６－3a昔は色の濃さのパターンがかなり違う。昔の70代、50代には３点、４点の言い方が多かったが、今は１点が多い。点数化して平均値を出したために、失われた情報である。図６－2a日本海の昔は、図６－3b北陸の今とそう違わない。図６－1aのTH昔は、図６－2abに似る。２、３、４点の中間的呼称が多いためである。図６－４ではTH今の数値の大きさが目立つが、図６－1bの５点（オトーサン）の高年層での急増による。図６－2b日本海今もこれに似たパターンである。

図６－４のように計量化して、語形の平均点を計算すると、相互の比較が楽になるが、失われる情報もあり、図６－１～３の細かい表示と照合する必要があり、さらに報告書のグロットグラムの具体的語形に戻る必要が出る。

７　他の調査データとの照合

７－１　山形県山添調査との照合

以上で滋賀県湖東のグロットグラム調査と広域グロットグラムを対照した。その基礎データとしての、１地点各年齢層１名の調査は、集落内部の社会階層差などを見るには数が不十分なので、以下では地点内多人数の調査によって、内部の差（変異）に着目する。山形県鶴岡市近郊山添の全数（悉皆）調査でも、グロットグラム「お父さん」と同一項目の調査を行い[20]、15年後、30年後の追跡調査も行ったので（井上2008.5）、実時間による変化が分かる。

図７－１に示すように、第３回調査（2007）について年齢層を15年きざみに分けて図化したところ、きれいな語形の交替が見られた。全体のパターンは図

[20] 調査質問文の「子供の頃」の言い方のみをここに提示する。
590.子供の頃、自分の父親を、何と呼んでいましたか？
591.いま、この家でトーチャンとかオトーサンと呼ばれているのは誰ですか？
592.その人を呼ぶ（ヨバル）時、あなたはどう言いますか。

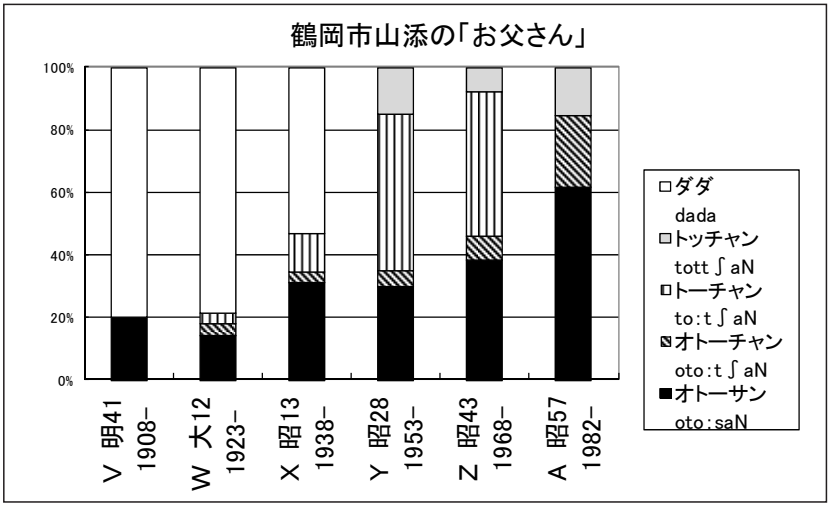


図７－１　鶴岡市山添の「お父さん」

６－1aの東北地方の昔とよく似る。双方の調査データの信頼性を語る。

VWX世代（1952年以前生れ）では白のダダが圧倒的で、途中のYZ世代（1953年以降出生）でトーチャンが増えた。黒のオトーサンはVW世代（1908～1937年生れ）で２割以下だったが、XYZ世代（1938～1981年生れ）で３～４割ほどに増え、若いA世代（1982～ ）で６割に急増した。つまり

ダダ　→　トーチャン　→　オトーサン

という交替があった。変化・共通語化が突然起こるわけではなく、語形交替の面から見ても、中間段階を経る。恐らく集落内の社会階層差の関係でオトーサンは全体に広がらなかったのだろう。オトーサンが急に増えたのは1938年生れからのX世代以降、トーチャンが増えたのは1953年生れからのY世代以降である。

この山添では戦後まもなく階層意識解消のために共通語使用運動があった。櫛引西小学校（1976：41、70、86）に関連記述があり、下山添（1988：105）の年表1953（昭和28）年に《「お父さん」「お母さん」と呼ぶことばづかいの矯正に小学校取り組む》との記述がある[21]。以前は地主・自作・小作で父親の呼

[21] 1952年に赴任したベテラン教師が《「だだ」、「うま」から「お父さん」「お母さん」といいましょう》と、朝礼で繰り返し呼びかけた(Inoue et al. 2022)。遠藤熊吉の標準語教育、戦前鶴岡市の発音矯正教育、1957年ころからの「ねさよ運動」とも年代がずれる。

称の区別（ダダと言うかどうか）があり、集落内で暗黙の知識になっていた[22]。生徒が呼び方の違いの階層的意味づけに気付き、意識することがあるので、小学校の熱心な教師がオトーサンを普及させようとしたという。戦前の標準語普及・方言撲滅と違う視点ではあるが、敬語の民主化平等化の動きと見ることができる。

当時の山添小学校の学区内と集落と、隣接の学区外の集落に２分した集落別のグラフによると（井上他2022、Inoue et al. 2022）、対応する使用率の違いがあり、この学校の共通語使用運動が功を奏した可能性がある[23]。

以上山添地区の年齢差（見かけ時間）を見た。滋賀県湖東[24]と山形県山添地区の使用状況を見ることにより、大きな地域差が浮かび上がった。湖東のほうで標準語化が進んでいて、お父さん系列の接辞の丁寧度が高い。同時にパパ、オヤジ使用のような民主化・平等化または２極化も進んでいる。山添地区ではこのような現象は観察されない。これは近畿地方と東北地方の大規模な地域差を反映する可能性があり、広域グロットグラムの考察に重要な手がかりを与える。

８　考察

８－１　「お父さん」の変異と変化の重層性

以上京都から北にかけての広い地域でのグロットグラムを統合し、統一した記号システムで示した。「お父さん」の敬意の高い呼称は、地域差と世代差から見て、当初は京都から広がったとも思われる[25]。

平山（1993）によって全国各地の「父」の分布が分かり、１地点で多様な語形が併用される様相が概観できる。また第７節山添の調査によって集落内に多様な語形が使い分けられていることが明らかになった。１地点内の使用状況を、

---

[22] 集落のインフォーマントの情報および庄内地方一円での調査結果による。

[23] 教科書的なオトーサンが一部の人に先に普及したが、その後もっと口語的、庶民的なトーチャンが増えたと、見なしうる。そうだとすると、1953年生れあたりを境に、ダダからトーチャンに呼び方を変えた家庭もあったと推定される。

[24] 北陸グロットグラムでは湖西を調査した。

[25] 近代以降は東京から東日本に急速に広がったと思われる。なお、敬意の度合いが逆転するような事態はないと仮定した。近畿方言や庄内方言で敬称「ハン」が付く語形があり、s>hの音変化に基づく点で共通だが、接辞の敬意体系からは別の位置付けがなされる可能性がある。しかし今回は形からみて同じ数値を与えた。本稿で扱った中央日本から北日本にかけては、普遍性のある変異と位置付けうる。

レパートリーの違いと見なすことが可能である。親族呼称の重層性の地域差を示す。なお、和田（2009）、大野木（2009）によれば中学生期の呼称切り替えが報告されているが、幼児語からの脱却についての報告は見当たらない。幼児期のことばについては想起できなくなるからだろう。ワンワン、ブーブーの使用経験、やめた時期やきっかけについて、具体的な報告を受けたことがない。これを知るには、母親や保育者の観察報告が有効だろう。「お外」「おバスケ」などの「おやたらづけ」についてと同様に、将来の課題である（井上2011.12）。

８－２　呼称変化の背景としての社会構造

図６－４で見られた呼称オトーサンの大きな地域差は、先行研究で指摘されたような社会構造の差、変化に基づく（国立国語研究所1968）。京都中心の文化の周圏論的普及と関わり、また国土の経済発展の地域差の反映でもある。東北地方および日本海岸は、かつて同族制度が強かった地域であり、（農地改革以前は）集落内の家格が固定していた。本家・分家関係も強く意識されていた。家族内呼称が集落全体で共有される傾向があった。近畿地方や首都圏などで、家庭内で子どもからと夫婦間で呼称が違い、子どもの前と夫婦だけの場面で呼称が違うという環境と違う。子ども世代での共通語化が進むと、近畿地方や首都圏などでは子ども世代だけの変化になり、世代差が大きくなるだけだが、東北・日本海岸では集落内で呼称の変化を共有する形になるので、高年層世代も共通語化を受け入れる形になる。図５－１で東北地方の全年齢層でオトーサンが普及し、かつ図６－１で全体の点数が上昇したのはこのためである。祖父母が孫に合わせて共通語を使い、新語流行語を採用するのと同様に、大きな加齢変化である。

上記４つの広域グロットグラムの昔と今の呼称を照合したところ、今オヤジに変えた人は、昔トーチャンまたはオトーチャンを使っていた人に多く、昔オトーサンを使っていた人には少なかった。オトーサン使用者が若い世代であることも考慮すべきだが、使用者の階層帰属意識とも関わる。湖東と札幌で観察された成人におけるオヤジの進出は、別の面からみると、東北などの伝統的集落での呼称の共有と似た面を持つ。血縁関係を持たない集落成員が名称・言及称として用いるオヤジを家族内で使うもので、方向は逆だが、集落の言及称と家族内呼称が一致することになる。成人男性は、本人がこどもからオトーサンと呼ばれる立場にあるので、区別のために別の呼称を要求するというメカニズムも働く。下北半島の呼称交代参照（川本1978）。

呼称としてのオヤジの使用は、戦後のものと思われ、辞書類には明確な報告が見当たらない。家庭内呼称としてのオヤジは、その深層または理論的背景を考えると、射程の大きい問題なのである。

８－３　敬意低減と文体時間の可能性

親族呼称は社会構造を多面的に反映する（井上2000.2）。「お父さん」をはじめとする親族呼称は、家庭の階層帰属意識に従って使い分けられる。各地の方言の報告で見られたように、地域社会の中で適切な呼称が選択される傾向があり、変化としては上層の言い方が下層に広がる傾向がある。「敬意低減の法則」があてはまり、「民主化平等化」の流れにも位置付けられる（井上1999.5）。共通語化、方言伝播における文化的中心地、都市の威光prestigeが、語形・接辞、語構成と連動している。新方言の一部が辺境から文化的中心地に逆流することがあるのに比べると、例外が少ない。敬意低減の法則があてはまるので、一定の時間がかかるとしたら、過去の言語史（語形の相対年代）を推定する第５の手がかりとして、「文体時間」style timeを仮定してもいい。ただし小林（2004）の指摘のように、日本語方言の分布で、過去の文献に表れない庶民の口語・俗語が広がる例があること、また、ロマンス諸語の方言の語源が俗ラテン語Vulgar Latinにさかのぼることを考えると、例外が多すぎる。

「お父さん」の前後の接辞は別の意味の文体（丁寧さ・敬意）を形成する。本稿で接辞に着目したところ、敬意の高い言い方が広がるという、納得のできる結果が得られた[26]。このような言語共同体全体に関わる多面的現象が、広域のグロットグラムを扱ったおかげで読み取れ、理論的に射程の大きい問題が浮かび出た。方言の史的背景を考察する分野への示唆をも提供できる。

同様の手法は他地域にも拡大可能で、たとえば加藤（1982）の方言地図も、数値化すると本稿との連続的な位置付け、考察の道が開ける。他にも国立国語研究所（1989）の資料を、新たな観点から整理し直せる。別の項目について、多様な方言形に数値を与える研究は他にもある。本稿で用いた敬意度に関連して文体（文章語的か俗語的かなど）で分類することも考えられる。語形のレー

[26] ただし、他の語形（パパ、オヤジ）にも同じ計算法を適用した点は、再考の余地がある。見かけ時間、空間時間から言って新しい現象であることに着目して、もっと高い点数（例えば6点、7点）を与えたら、北陸ことに京都付近の点数が高くなり、京都からの伝播というメカニズムが明瞭になっただろう。新古・変化という別の基準の導入である。一方で本稿のように敬意の接辞に着目したおかげで、現代日本でこれまでと別の動きが出たことが確認できた。

ベンシュタイン距離を計測する手法も、一つである。初出年や使用頻度数を利用する方法もある。

８－４　記憶時間と空間時間の可能性

本稿では現在の言い方と「記憶時間」による子どものころの言い方がかなり違うことが示され、背景として個々の呼称の適用範囲の広さの地域差が想定された。言語変化の調査理論に関しては、従来の「実時間」「見かけ時間」に加えて「記憶時間」「空間時間」という概念を導入できる。記憶時間に関する過去の研究（柴田1969）や将来の可能性については[27]、簡潔に触れたことがある（井上2014.12）。想起法とも呼ばれ、社会調査で回顧項目、回顧質問と呼ぶものと同じである（吉川2014）。空間時間（地域差の利用）に関しては井上（2015.9）で簡潔に触れた。詳しい紹介と議論は別稿に譲る。

８－５　実時間のグロットグラム比較

グロットグラムの繰り返し調査は、半沢（2017）で実施されたが、湖東のように特に意図せずに繰り返された地域もある。近畿地方には多種のグロットグラムがあるので、対比研究が可能である。方言地図の繰り返し調査の例は多く、共通語形が「空からばらまいたように」分布し、以前の方言形が「くしの歯が欠けるように」失われる過程が、糸魚川などで観察された。しかし数値化した計量的研究は多くなかった。

グロットグラムのデータは地域と年齢層で区切ることが可能なので、数値化しやすい。多くの場合、文化的中心地から広がり、若い世代から普及する。「お父さん」のように敬意に関係する接辞が付く場合は語形自体も数値化できる。ここでは多くの調査データを踏まえてアプリオリに５段階の数値を与えたが、荻野の数量化（交互平均法）などを適用して、順番の正しさや詳しい数値を検証することもできる。ただし多くの多変量解析法の適用結果は、話者の内省と一致することが多い。本稿での接辞の数値（順位変数）も、大きな間違いを含むものとは思えない。「お父さん」の呼称は、話者の暗黙の社会階層意識を示すものと位置付けうる。記憶時間の手がかりとしても有効であり、今後の研究の進展を祈りたい。

---

[27] 記憶時間の調査にふさわしい項目（印象・記憶に残りやすい事項）がある。児童期のことば、流行語、差別語、不快語などである。

９　結論

９－１　「お父さん」における民主化・平等化

以上本稿では「お父さん」の接辞に着目して、年齢層という見かけ時間、時を隔てた調査という実時間、昔（子どものころ）という記憶時間を利用して、過去の言語史の復元を試みた。その結果滋賀県湖東地域の状況が、札幌市の調査と一致して新しい変化を指し示していると読み取れた。この読み取りは「お父さん」を指す多様な語形を接辞によって分類し配列することにより可能になった。標準語形オトーサンが進出するとともに（井上2015.9）、オヤジという新しい呼称が成人の間に普及している。下からの変化により、呼称の２極化、接辞に左右されない呼称が普及しつつある。敬語の民主化・平等化の発現と位置付けることができる。

９－２　広域グロットグラムの総合

これまで京都以東の広域グロットグラムを、項目ごとに対比して、語史を再構し、地理的年齢的分布を分析した。そこで見られたのは、京都または東京を中心にしたなだらかな周圏論的分布ではない。地域により、地方都市や交通路の影響を受けた受容程度の相違だった。「語はそれぞれ独自の歴史を持つ」という言語地理学の古典的テーゼを裏付ける傾向だった。「お父さん」の分布でも見られた。ただし個別単語の独自の偏りにこだわるべきではない。多くの単語を多変量解析にかけると、一定の傾向性が把握される。計量方言学dialectometry, computational dialectologyの成果を待つべきである。手元のグロットグラムデータでは、各調査に個別に適用して全体傾向を確かめてきたが、今後の課題として、各グロットグラムの共通項目について総合的なデータを作成し、多変量解析にかける仕事がある。これにより現代の地理的年齢的伝播パターンを見出すことができるだろう。さらに1767年編纂の『庄内浜荻』の残存語彙調査を連結すれば、小地域の長期の方言変化との関連も分かる（井上・半沢2022.9、Inoue & Hanzawa 2021.9）。日本語方言の広域・長期の変化の解明に、少しでも役立てれば幸いである。

文献（alphabet）

Chambers, J. K., and P. Trudgill (1980）*Dialectology* Cambridge University Press

Coulmas, Florian (1997) *The Handbook of Sociolinguisics* Oxford: Blackwell

Eckert, Penelope（2017）Age as a Sociolinguistic Variable Chapter 9 in Florian Coulmas (ed.) *The Handbook of Sociolinguisics* Oxford: Blackwell

半沢康（2017)「グロットグラム調査データの実時間比較」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』朝倉書店

Heeringa, Wilbert (2004) “Measuring Dialect Pronunciation Differences using Levenshtein Distance” *Groningen Dissertations in Linguistics* 46

平山輝男（1993)『現代日本語方言大辞典』第４巻 明治書院

井上史雄（1998.1)『日本語ウォッチング』岩波新書

井上史雄（1999.5)『敬語はこわくない』講談社現代新書

井上史雄（2000.2)『東北方言の変遷』秋山書店

井上史雄（2003.3)『東北・北海道方言の地理的・年齢的分布（THグロットグラム)』(科学研究費報告書)

井上史雄（2008.3)『日本海沿岸地域方言の地理的・年齢的分布（日本海グロットグラム)』(科学研究費報告書)

井上史雄（2008.5)『社会方言学論考―新方言の基盤―』明治書院

井上史雄（2011.12)『経済言語学論考―言語・方言・敬語の値打ち―』明治書院

井上史雄（2014.12）「昭和の方言―鶴岡と郊外の言語変化」『日本語学』32-15 pp.16-24

井上史雄（2015.2)「敬語の成人後採用―岡崎敬語調査の「川の字」変化―」『国語研プロジェクトレビュー』５巻３号pp.98-107

井上史雄（2015.9)「「お父さん」の記憶時間―グロットグラムによる地域差と年齢差」『社会言語科学』18-1 pp.128-146

井上史雄（2022.3)「静岡の新方言と標準語の普及過程」『静言論叢』5

井上史雄（2022.7)「LAJ標準語形の分布と鍾乳洞モデル　鉄道距離の地理的歴史的解釈」『東京外国語大学論集』104

Inoue, Fumio and Yasushi Hanzawa (2021.9) “Multivariate analysis of geography and age in dialect vocabulary ― Comprehensive analysis of 250 years of language change―”, *Dialectologia: revista electrònica* 20.

井上史雄・半沢康(2022.9)「方言の地域差から年齢差へ―庄内浜荻グロットグ

ラムの多重対応分析―」『言語研究』162: 63-89.
Inoue, Fumio, Yasushi Hanzawa, Kazuko Tanabe, Akemi Yamashita (2022) “Real time and memory time of “father“ --- Social and linguistic motivation observed in Glottograms---“ *Dialectologia et Geolinguistica* 30: 69-89
井上史雄・半沢康・田辺和子・山下暁美（2022）「「お父さん」の実時間と記憶時間－グロットグラムにおける見かけ時間の認知方言学―」『東京外国語大学論集』103 pp.1-29
井上史雄・加藤和夫・中井精一・半沢康・山下暁美（2011.3）『北陸方言の地理的・年齢的分布（北陸グロットグラム）』（科学研究費報告書）
井上史雄・玉井宏児・鑓水兼貴編（2003.3）『東北・北海道方言の地理的・年齢的分布（THグロットグラム）』（科学研究費報告書）
加藤和夫（1982）「若狭地方における家族呼称の分布とその変遷」『日本語研究』5: 21–33
川本栄一郎（1978）「下北半島の親族語彙」柴田武編『日本方言の語彙』三省堂
岸江信介他（2017）『近畿言語地図』徳島大学日本語学研究室
小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
小池清治（2001）『現代日本語探究法』朝倉書店
国立国語研究所（1968）『社会構造と言語の関係についての基礎的研究（1）』秀英出版
国立国語研究所（1986）『社会変化と敬語行動の標準』秀英出版
国立国語研究所（1989）『日本方言親族語彙資料集成』秀英出版
櫛引西小学校（1976）『山添学校から百年』櫛引町立櫛引西小学校
松本修（2013）『どんくさいおかんがキレるみたいな。―方言が標準語になるまで』新潮文庫
ネウストプニー, J.V.・宇佐美まゆみ（1996）「人間関係を表す言葉（2）ポジティブ・ポライトネスと敬語回避」『月刊日本語』9（10）
野口幸雄（2006）『蒲原の暮らしのことば: 新潟方言誌』新潟日報事業社
大野木裕明（2009）「女子青年からみた親子間の呼称と心理的離乳」『仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇』1, pp.53-61
尾崎喜光（1989）「〈私〉〈母〉を表わす語の性差・場面差およびその移り変わり―札幌市における社会言語学的調査から―」『日本方言研究会第49回発表原稿集』：28-37
柴田武（1969）『言語地理学の方法』筑摩書房

柴田武（1978）『社会言語学の課題』三省堂
柴田武編（1978）『日本方言の語彙』三省堂
下山添（1988）『下山添誌』櫛引町下山添
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
和田香誉（2009）「父母の呼称に関する研究Ⅱ―大学生について―」『日本教育心理学会総会発表論文集』（51）
山下暁美（2013）「日本海沿岸地域における方言と標準語使用の実態―否定辞と敬語をめぐって―」『応用言語学研究』15：105-118
山下暁美・半沢康（2008）「滋賀（湖西）グロットグラム」井上史雄『日本海沿岸地域方言の地理的・年齢的分布（日本海グロットグラム）』科学研究費報告書pp.175-244
Yamashita, Akemi & Yasushi Hanzawa (2010) “The language variation and diffusion in Japan ― research through Glottogram ― ”, B. Heselwood & C. Upton (eds.) *Proceedings of Methods XIII* University of Leeds 2008 (Peter Lang)
吉川徹（2014）「「職業とパーソナリティ」国際比較調査―ライフコース長期追跡調査の実際―」『2013年青山学院大学社会連携機構アジア国際センター活動報告書』青山学院大学 社会連携機構 アジア国際センター　101-118.

謝辞

各地のグロットグラム調査では、教育委員会・公民館長・自治会長・町内会長・老人会長の皆様にお世話になった。また調査相手をしてくださった方々からは貴重な情報をいただいた。各位に心から御礼申し上げる。また調査員として活躍した東京外国語大学のゼミナール参加学生諸君には、改めて感謝する。共同研究者・研究分担者には、実地調査に参加いただき、報告書刊行に協力をいただいた。エクセルデータの共有を了解していただいたので、図を自由に加工でき、今後の再分析にも便利である。本稿の主要部分は2015年に完成していたが、諸般の事情により、刊行が遅れた。長文の論考の掲載を許可していただき、関係者に感謝申し上げる。

(Abstract)

Memory time and real time of address terms for "father"
— Glottogram data and quantified data —

FUMIO INOUE　YASUSHI HANZAWA　AKEMI YAMASHITA

In this paper various dialectal address terms for “father” (Otosan, tochan, nana etc.) were analyzed. Several new findings were introduced. First, degrees of respect were calculated for various address terms for “father” using honorific affixes as clues. Each speaker's response was simplified to one of five degrees and represented in glottograms. To add to this, average values of the respect degrees of all the areas were calculated for four age groups and three area groups. Thus, all glottogram data from Hokkaido, Tohoku, Hokuriku and Kyoto-Osaka areas were concisely represented, and furthermore, overall differences among regions and generations were illustrated concretely and objectively. Areas near Kyoto were early in adopting more respectful address terms while Tohoku region kept less respectful archaic forms. Secondly, changes within 20 years were ascertained by comparing data of repetitive “real time” surveys. As a result, two different directions of change were observed on the basis of simplification of various address terms into quantified forms: higher use of more polite affix and democratization versus equalization (neutralization) of honorifics like papa and oyaji. However, since the various designations were simplified by quantification, not all of the information was treated. Thirdly, a research technique which makes use of “memory time” by asking informants’ address terms in childhood and at present showed that rapid standardization has occurred recently among young (and also old) speakers. As a result, the validity of the “memory time” was confirmed, and large regional differences in change throughout Japan and the influence from the Kinki region were ascertained.